

祭壇の「五つのささげ物」が象徴しているイエシュア

ベレーシート

●シリーズ「神の御住まい」についての学びの第六回目です。前回は幕屋の入り口に入って最初に目にする「青銅の祭壇」(「ミズバハ・ハンネホーシェット」 מִזְבֵּחַ הַנְּחֹשֶׁת)それ自体の形、寸法、数、などに象徴されているイエシュアについて学びました。そしてその上で焼かれる「罪のためのいけにえ」についてもふれました。今回はさらに、この祭壇の上で焼かれる「五つのささげ物」が象徴していることについて学び、**イエシュアの十字架の贖いの神秘**について考えてみたいと思います。主要なテキストはレビ記の1~6章です。

まずはこれから学ぼうとする事の概略を知るために、「五つのささげ物」のチャートを別紙として作成しました。全体の概略を知ることは、各供え物をより良く理解するのに役立ちます。



●神を礼拝するために、なにゆえに「五つのささげ物」が必要なのでしょう。なぜ神はそれらをお求めになられるのでしょうか。「五つのささげ物」はすべて祭壇の火で焼き尽くされなければなりません。「穀物のささげ物」(チャートの緑色の部分)を除く、他の四つのささげ物(赤色の部分)、すなわち、「**全焼のいけにえ**」「**和解のいけにえ**」「**罪のためのいけにえ**」「**罪過のためのいけにえ**」は、すべて**血を注ぎ出すいけにえ**です。いけにえとなる動物(家畜)は、「牛」「羊」「やぎ」「鳩」です。若い「牛」は(羊・やぎにしてもそうですが)、とても貴重な財産です。しかも傷があつてはなりません。病気や欠陥のない、健康なものでなければならぬのです。ましてや余り物や不要なものは言語道断、神に受け要れられません。傷のない牛のささげ物、それは奉獻者にとってとても価値あるものです。その価値あるものに自分の手を按(お)いて、つまり、自分の身代わりとして神にささげたのです。「穀物のささげ物」にしても上等な小麦粉でなければなりません。

●幕屋の祭壇の上で焼き尽くされる「五つのささげ物」は、神を礼拝する上でなくてはならないものとして、神が要求された「ささげ物」です。礼拝のことを英語ではワーシップ(Worship)と言います。これは価値を意味する「ワース」(worth)と抽象名詞を作る時に使われる語尾の「シップ」(ship)が組み合わせされたものです。つまり、神を価値づける行為こそが Worshipなのです。礼拝とは、神が自分にとって最高のお方として認め、最高に価値あるお方であることを表わす行為です。そのことをあかしする手段として、動物の場合には、奉獻者みずからその動物をほってその血(=いのち)をささげ、すべての「脂肪」も主のものとして取り分け、それを祭壇の上で焼かれて香ばしい煙とされました。動物をほふって主へのささげ物とするということは、一見、何と血生臭いことかと思われるでしょうが、そのことにつまずいてはなりません。いけに

えとして動物をほふるということを通して、神に最高のものをささげることが礼拝であることを神は教えようとされたのです。また、穀物の場合には「上等の小麦粉」と、それで作った「パン菓子」や「薄煎餅」が要求されます。いずれも、礼拝されるべきお方が最高に価値あるお方として示されることが重要なのです。

●それにしても、なぜ脂肪なのでしょう。適度に脂肪がある肉、脂のった魚はいずれも美味しい部分です。主は脂肪が大好きなのではなく、それが奉献者にとって最上の部分だからです。「脂肪」を意味するヘブル語の「ヘーレヴ」(חֶלֶב)は、「脂肪」という意味だけでなく、「最も良い部分、選り抜きの部分、最上の部分、肥えたもの」を意味します。この「ヘーレヴ」が聖書で最初に登場するのは創世記4章4節です。

【新改訳改訂第3版】創世記4章4節

アベルもまた彼の羊の初子の中から、それも最上のものを持って来た。

【主】はアベルとそのささげ物とに目を留められた。

●新改訳は「ヘーレヴ」(חֶלֶב)を「最上のもの」と訳し、新共同訳は「肥えた」と訳しています。このことのゆえに、主はアベルとそのささげ物とに目を留められたのです。主はその最上のものを食するわけではありません。それをささげる人の心に、常に目を留められるのです。ささげ物を通して、神が人との生きた真実のかかわりを求めておられるのです。人の側も、神との生きたかかわりを表わす手段を神が啓示してくださなければ、そのかかわりを得る道が分からないという意味で、「五つのささげ物」の啓示は神の恵みだとも言えるのです。

1. 「罪と罪過のためのいけにえ」が象徴していること

●モーセを通しての「ささげ物」に関する神の啓示は、「全焼のいけにえ」⇒「穀物のいけにえ」⇒「和解のいけにえ」⇒「罪のためのいけにえ」⇒「罪過のためのいけにえ」という順序で語られていますが、私たちが神を礼拝するために近づくには、その順序とは逆です。「罪のためのいけにえ」と「罪過のためのいけにえ」を主にささげるとは、すべての礼拝者にとって必要不可欠なものであり、イスラエルの民が神を礼拝するために最初に求められる義務的(強制的)な「いけにえ」でした。特に、「罪のためのいけにえ」は五つのささげ物において、全体の土台となるものです。まずそのことについてお話ししたいと思います。

●「罪のためのいけにえ」が求められているのは、礼拝者に「**罪の赦し**」を与えることです。そのいけにえには、奉献者の良心から罪を取り除く(=罪が赦される)ことによって神との関係を回復させるという明確な意図と目的があります。

●キリスト教会には(おそらくどこの教会であっても)、どこかに十字架を見ることができるはずですが、十字架はアクセサリーではありません。十字架はモーセの幕屋でいえば「青銅の祭壇」に相当します。キリストが私たちの罪の身代わりとなって、神が要求される完全な「罪のためのいけにえ」となってくださったというしるしです。十字架それ自体はのろいでもありません。罪に対する神のさばきなのです。十字架刑は口

ーマが考え出したきわめて恐ろしい刑罰の道具ですが、神の御子イエシュアは自らの罪のためではなく、私たちが犯した罪の身代わりとして十字架の上で一回限りにおいて、完全な「罪のためのいけにえ」となってくださったことを表わしています。イエシュアの十字架の死は、神を永遠になだめることのできる究極的、かつ完全な「罪のためのいけにえ」なのです。

●イスラエルの民が「罪のためのいけにえ」を主にささげて、その血を祭壇の**土台に注ぐ**ことによって罪が赦されたように、イエシュアの十字架の上で流されたその血潮はすべての人の罪を赦す力をもっているのです。前者は後者の影、予型であったのです。イエシュアの十字架の上で流された血の力を信じる者に神は無償で罪の赦しを与えて下さるのです。礼拝に来て教会の門をくぐる時に、もう一度、教会堂の屋根の上にある十字架を見上げてから会堂に入ってはいかがでしょうか。イエシュアの流された十字架の血潮によって、私の罪は赦され、私の罪が覆われているので、臆することなく、大胆に、神に近づいて礼拝しようとしているのだということを自分の心に思い起こさせるのです。

●もしイエシュアが十字架の上で血を流すことがなかったとすれば、だれ一人として神の前に近づくことはできません。ましてや、神の祝福を受ける者などだれもいないのです。聖書には「**血を注ぎ出すことがなければ、罪の赦しはないのです。**」(ヘブル9:22)とはっきりと書かれています。血はいのちそのものであり、私たちが罪を赦されることができるためには、私の身代わりとなってくれるいのち(=血)が必要なのです。罪深い私のためにだれが身代わりとなってくれる者がいるでしょうか。子どものためには身代りになっても良いという親はいるでしょう。しかしその親が身代わりになるためには、罪のない者でなければなりません。どんなに自分の子の身代わりとなつてあげたいと思つたとしても、身代りになれる資格そのものが親にはないのです。それほどに、罪が赦されるためには大きな犠牲とそれにふさわしい価値が求められるのです。罪の赦しを得ていなければ、罪に対する責任(永遠の死というさばき)はひとりひとりが取らなければなりません。この責任から免れる者はだれひとりとしておりません。「**すべての人は、罪を犯したので、神からの栄誉を受けることができません**」とあります。しかし、「**ただ神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖い(身代わり)のゆえに、価なしに義と認められる(=神との正しい関係にあることと認められる)**」(ローマ3:24)という救いの道を神は備えてくださったのです。

●私たちが認めようが、認めまいが、神は私たちひとり一人に対して罪の責任を要求します。その責任の代償は「死」です。とすれば、一体だれが神の前に大胆に立つことができるでしょうか。だれが神の前に平安を持って生きることができるでしょうか。だれひとりとしていないはずで、ところが、「罪赦されて」、神の前に立つことのできるただひとつの解決の道があります。その道とは、私の身代わりとなつて死んでくださった(つまり、さばきを受けて下さった)イエシュアこそ自分の唯一の救い主であることを信じることです。信じることで罪が赦されるのですから、当然さばかれるという恐れから解放されて、平安を得ることができるのです。かつ永遠のいのちを与えられて、神と交わり、神を知り、神と親しくなることができるようになるのです。その保障を私たちに与えてくれているのが**イエシュアの血潮**なのです。

●少し別の面からお話したいと思います。神の御子イエシュアは、なぜ私たち人間と同じからだをもってこの世に来られたのでしょうか。なにゆえにイエシュアは人とならなければならなかったのでしょうか。その

מִשְׁכָּן

必然性は何だったのでしょうか。答えはこうです。旧約の人々がいけにえとして自分の身代わりとなってくれる牛や羊や山羊に神の前に連れて来て、それらに自分の手を按(お)いて、そのいけにえとなる動物と自分と同一であることを示したように、イエシュアは私たちに代わるいけにえとなるために、「からだ」を持たれたのです。イエシュアが十字架の上で流されたその血(血潮)は、私たちの罪が赦されるためになくてはならない神の「最後の切り札」なのです。私たちひとりひとりに対する神様からの最高の愛のプレゼントです。この神の愛のプレゼントを受け取らずして天の御国に入ることは決してだれにもできません。なぜなら、天の御国は罪を赦された者だけが入ることができるからです。その神の国(天の御国)に入ることができるように、イエシュアはからだを持たれ、人となられました。それは私たちの「罪のためのいけにえ」の身代わりとして、罪の苦しみを負い、私たちの罪の赦しを与えるために十字架の上で血を流さ、死なれたのです。

●幕屋の祭壇では、「罪のためのいけにえ」の血だけは祭壇の四隅にある四つの角に塗られます。「角」は上側と外側の方向を指し示していますが、それは血の力と勢いが、神に対しても、また全地の四隅にいるあらゆる人々にも効力があることを告げていると考えられます。そして残りの血はすべて祭壇の周囲ではなく、祭壇の土台に「注がれた」ことはきわめて重要です。それは「罪の赦し」(贖い)の根拠となる土台が、完全に「罪のためのいけにえ」の血によるものであることを表わしているからです。



四隅の角

①【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙 10章 19 節

こういうわけですから、兄弟たち。私たちは、**イエスの血によって**、大胆にまことの聖所に入ることができるのです。

②【新改訳改訂3】ローマ 人への手紙5章9節

ですから、今すでに**キリストの血**によって義と認められた私たちが、彼によって神の怒りから救われるのは、なおさらのことです。

③【新改訳改訂第3版】I ペテロの手紙 1章 18~19 節

18 ご承知のように、あなたがたが父祖伝来のむなしい生き方から贖い出された(=救い出された)のは、銀や金のような朽ちる物にはよらず、19 **傷もなく汚れもない小羊のようなキリストの、尊い血**によったのです。

●先ほど歌った歌をもう一度思い起こしましょう。これはある賛美歌を私が改編して作ったものです。

- | | |
|---|--|
| 1. イエシュアの十字架の血で私は赦され
御神の恵みにより いのちを得ました
※ だから今たたえます 勝利の小羊を
尊い主の血潮で 私は救われた | ※ だから今たたえます 勝利の小羊を
尊い主の血潮で 私は救われた |
| 2. イエシュアの十字架の血で私は覆われ
御神の御手にふれて いやしを得ました | 3. イエシュアの十字架の血で私は隠され
御神の愛の中に 住まいを得ました
※ だから今たたえます 勝利の小羊を
尊い主の血潮で 私は救われた |

2. 任意の自発的な三つのささげ物が象徴していること

●祭壇でささげられる「全焼のいけにえ」「穀物のささげ物」「和解のいけにえ」の自発的な三つのささげ物は、「罪を赦された」者にのみ許される任意のささげ物ですが、これらの三つのささげ物は、イエシュアが私たちの「罪のためのいけにえ」となってくださっただけでなく、「罪のためのいけにえ」が永遠に効力のある完全で、しかも力あるものであることをあかすするために、「全焼のいけにえ」とも「穀物のいけにえ」ともなってくださったことを象徴するものです。まず「全焼のいけにえ」が象徴していることについてお話し、次に「全焼のいけにえ」といっしょにささげられる「穀物のささげ物」についてもお話しします。そして最後に、「和解のいけにえ」が意味していることをお話しして行こうと思います。

(1) 「全焼のいけにえ」が象徴していることは、神に対する「全き献身」「全き従順」です。

●「全焼のいけにえ」が象徴しているのは、神に対する「全き献身」と「全き服従」です。そのことによって、神に対して自らを聖別する(つまり、自分を「神の所有」とする)ために、この世からも聖別する(分離する)ことを意味しています。「全焼のいけにえ」は、奉献者自らが主体的・自覚的にささげることの意味があります。つまり本人の自由意志が重んじられるのです。そのことを示すことばがレビ記1章3節にあります。

【新改訳改訂第3版】レビ記1章3節

もしそのささげ物が、牛の全焼のいけにえであれば、傷のない雄牛をささげなければならない。それを、彼が【主】の前に受け入れられるために会見の天幕の入口の所に連れて来なければならない。

●ここには、奉献者が「【主】の前に受け入れられるために」ささげる「全焼のいけにえ」について記されています。「主の前に受け入れられるために」と訳された原文は以下のとおりです。

アドナイ	リフネー	リルツォーノー
יהוה	לפני	לרצונו
固有名詞	名詞連復 前	名詞接尾 前
主の	面前に	それが受け入れられるために
		名詞は「ラーツォーン」(רצון) 喜び、好意

●「全焼のいけにえ」こそは、神の前にある神の「好意」そのものであり、神が「喜び」をもって受け入れてくださる最高のいけにえ、つまり、「いけにえ」中の「いけにえ」なのです。このことを使徒パウロがローマ書12章1節で次のように記しています。

【新改訳改訂第3版】ローマ書12章1節

そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。

●「神に受け入れられる」供え物とは、「聖く、生きた供え物」を意味します。それは「**全き献身、全き服従**」を意味します。そして、それこそ「あなたがたの霊的な礼拝」なのだとしています。

●ところで、完全に「神の所有」となるための「全き献身」「全き服従」を意味する「全焼のいけにえ」ですが、このような礼拝をいっただれがささげることができるのでしょうか。そのような人間がいるのでしょうか。人間の場合、決して完全ではありません。なぜなら、必ずや「**偽善**」が入り込むからです。つまり、たとえ奉獻者がささげる動物に手を按(お)いで自分と同一だと言っても、ささげるパンに「**偽善**」を象徴するパン種を入れなかったとしても、果たしてそれが真実であるかどうかは疑問のあるところであり、限界があるのです。そのために神が心からそれを受け入れ喜ぶことができなかつたのです。**それゆえ**、神は詩篇 40 篇の作者を通して、任意のささげ物の内実を完全に満たすことのできる唯一の存在であるメシア、そのメシアの到来を預言させています。以下の詩篇がそうです。

【新改訳改訂第3版】詩篇 40 篇 6 節

あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりませんでした。あなたは私の耳を開いてくださいました。

あなたは、全焼のいけにえも、罪のためのいけにえも、お求めになりませんでした。

●この詩篇にある「**あなた**」とは主なる神です。そして、「あなたは私の耳を開いてくださいました」の中の「**私**」とはいったい誰のことでしょうか。一義的にはこの詩篇の作者ですが、その作者を越えた存在がここでは語られています。つまり、メシア的しもべの存在です。出エジプト記 21 章 1～6 節に「七年目に自由の身とされた奴隷」が、その時が来ても自由の身となって去りたくはない」という場合に(余りにも主人がすばらしい主人だったからでしょう)、主人がその奴隷を神(祭司)のもとに連れて行き、彼の耳をきりで刺しとおさなければならない。そうすれば彼はいつまでも主人に仕えることができる」とする律法があります。まさに、「耳を開いてくださった」とは、奴隷が自ら主人に仕えたいという思いにさせられたことを意味しています。詩篇 40 篇の「あなたは、いけにえや穀物のささげ物をお喜びにはなりませんでした。あなたは私の耳を開いてくださいました。」という部分を、ヘブル人の手紙の作者は次のように注解しています。

【新改訳改訂第3版】ヘブル 10 章 5～7 節

5 ですから、キリストは、この世界に来て、こう言われるのです。「あなたは、いけにえやささげ物を望まないで、

わたしのために、からだを造ってくださいました。

6 あなたは全焼のいけにえと罪のためのいけにえとで満足されませんでした。

7 そこでわたしは言いました。『さあ、わたしは来ました。聖書のある巻に、わたしについてしるされているとおり、

神よ、あなたのみこころを行うために。』

●「耳を開いてくださった」とは、「神がわたしのために、からだを造ってくださった」、それは「神のみこころを行うため」だと解釈されています。つまり、「からだを与えられて、そのからだをもって、神に対する全き献身と全き従順のいけにえをささげることを可能とならしめてくださった」ということを意味します。そのような「わたし」とは、メシアなるイエシュアを啓示しているのです。

(2) 「穀物のささげ物」が象徴していることは、謙遜の限りを尽くして人に「仕えること」です。

【新改訳改訂第3版】レビ記 2章 13節

あなたの穀物のささげ物にはすべて、塩で味をつけなければならない。あなたの穀物のささげ物にあなたの神の契約の塩を欠かしてはならない。あなたのささげ物には、いつでも塩を添えてささげなければならない。

● 「穀物のささげ物」には「契約の塩」が不可欠です。なにゆえに、このささげ物にはすべて「塩」（「メラハ」 מֶלַח）で味付けし、また「塩」を添えなければならないのでしょうか。それは、神とアロンが結んだ「塩の契約」がその背景にあると考えられます。「塩の契約」とは「不変の契約」を意味します。聖書ではこの「塩の契約」について二箇所記されています。民数記 18章 19節とⅡ歴代誌 13章 5節です。前者は大祭司アロンと交わした契約であり、後者はダビデと交わした契約です。ここでアロンと交わした契約に思いを留めたいと思います。そこには、アロンとその子孫が専心して主とイスラエルの人々のために仕えることができるように、生活の保障を約束しています。

【新改訳改訂第3版】民数記 18章 19節

イスラエル人が【主】に供える聖なる奉納物をみな、わたしは、あなたとあなたの息子たちと、あなたとともにいるあなたの娘たちに与えて、永遠の分け前とする。それは、【主】の前であって、あなたとあなたの子孫に対する永遠の塩の契約となる。」

● 当時、「塩」は貴重なものでした。「塩」はまさに神と人、人と人との愛のかかわりを保ついのちそのものと考えられていた象徴性のあるものです。「塩け」は神との親しいかかわりの中で育てられます。したがって、神への愛と献身が薄らげばその塩味も薄れることになります。イエシュアは弟子たちに「**あなたがたは、自分自身のうちに塩けを保ちなさい。そして、互いに、和合して暮らしなさい。**」（マルコ 9:50）と言われましたが、このイエシュアのことばを文脈の流れの中で理解するならば、弟子の道と関連があることが分かります。つまり、50節は、イエシュアの「だれでも人の先に立ちたいと思うなら、みなのおしんがりとなり、みなに仕える者となりなさい」（35節）という教えの結論的フレーズとなっているのです。神との親しいかかわりを通して、自分自身のうちに塩気を保ちつつ、人に仕える者となることを通して、互いの中に神の平和を作り出すこと。そのように考えるなら、「穀物のささげ物」はまさにメシアなるイエシュアの生涯を象徴してはいないでしょうか。使徒パウロはそのイエシュアの姿を次のように記しました。

【新改訳改訂第3版】ピリピ人への手紙 2章 3～8節

- 3 何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって、互いに人を自分よりもすぐれた者と思いなさい。
- 4 自分のことだけでなく、他の人のことも顧みなさい。
- 5 あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。
- 6 キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、
- 7 ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、
- 8 自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。

● しかも、「穀物のささげ物」としてのささげ物には少しの「パン種」（酵母菌）も、また「蜜」をも入れて

作ってはなりません。なぜなら、「パン種」は偽善と腐敗の象徴であり、「蜜」（今日の果物のジュースのようなもの）は火にかけると酸っぱくなって、味が変わるという自己中心的な奉仕を象徴するからです。そのような奉仕は多くの人々に迷惑をかけ、傷つけることとなります。そのような自己中心的な奉仕をもってしては神の栄光を現わすことはできません。それゆえ、「何事でも自己中心や虚栄からすることなく、へりくだって」仕える者となることが必要なのです。それは、「自分を無にする」「十字架につける」とあるように、自我が碎かれることが求められます。その意味において、イエシュアは十字架において完全な意味において、「穀物のささげ物」となられたと言えるのです。

●ヨハネの福音書 13 章にある「洗足」の行為も「穀物のささげ物」を象徴していると言えます。イエシュアは弟子たちに、「このわたしが、あなたがたの足を洗ったのですから、あなたがたも互いに足を洗い合うべきです。」(13:14)と語られ、自ら「仕える者」としての模範を示されました。

●また使徒パウロは、「私たちは、多くの人々のように、神のことに混ぜ物をして売るようなことをせず」(Ⅱコリント 2:17)と述べていますが、これはパンとなる小麦粉の中に少しの「パン種」(酵母菌)も「蜜」も入れてはならないという「穀物のささげ物」の規定から語られていると考えられます。イエシュアの言われた「あなたがたは地の塩です」ということばも、聖書が意味する「塩」についてヘブル的概念で理解する必要があります。と云えます。

(3) 聖霊の象徴としての「油」

●「穀物のささげ物」には小麦粉と共に「塩」だけでなく、「油」(オリーブ油)が加えられました。「油」は聖霊の象徴です。神のみこころにかなった奉仕をするためには聖霊の助けが必要です。イエシュアが公生涯に入られる前に、聖霊による油注ぎを受けられました。イエシュアの三年半にわたる働きにはすべて聖霊の導きと助けが与えられていました。私たちも神と人ともに仕える者となるためには、聖霊の助けが必要です。

(4) 祈りの象徴としての「乳香」

●また、「穀物のささげ物」には「乳香」を添えてささげなければなりません。乳香を添えるのは「穀物のささげ物」だけです。「乳香」は「祈り」を象徴しています。聖霊を象徴する「油」と祈りを象徴する「乳香」はワンセットです。イエシュアは公生涯において多くの人々に仕えましたが、その背後には祈りがありました。どんなに疲れていたとしても、イエシュアは朝早く寂しい所に退かれて祈っておられました。この祈りこそ「乳香」のかおりであり、イエシュアの原動力だったのです。



●乳香の樹脂は樹木から分泌される固形の樹脂のことで、半透明で乳白色をしています。それがこの名前の由来になったようです。乳香は焚いて香として、または香水などに使用する香料の原料として利用されています。イエシュアが誕生したときに、東方の博士たちが黄金、没薬(もつやく)と共に乳香を贈り物としてささげたことが新約聖書に書かれています(マタイ 2:11)。乳香は没薬と同じく最古の香料の一つで、当時は黄金と同等の価値を持つ貴重なものとして扱われていました。

(5) 「和解のいけにえ」が象徴していることは、神と人との間にある平和と喜びです。

●青銅の祭壇でささげられる「和解のいけにえ」(和解の献げ物)を、口語訳は「酬恩祭」と訳しています。「酬」(しゅう)とは「報いる」という意味で、「酬恩」は神の恩に(恵みに)「報いる」、すなわち、神に「感謝して」ささげられるいけにえです。「全焼のいけにえ」と異なる点は、「全焼のいけにえ」は皮を除いてすべての部分が焼き尽くされるのに対して、「和解のいけにえ」の特徴は脂肪と腎臓だけは火で焼き尽くされますが、肉と内臓の部分は祭司とそれをささげた人とその家族が分け合って食することのできるものです。

●当教会では、毎週、「礼拝と愛餐」がワンセットになって「礼拝」としています。これは「酬恩」というコンセプトによるものです。神にささげられた献金によって、礼拝に参加した者たち全員が神の家族としての愛餐の食卓を囲みます。そのための費用として愛餐の食費を徴収することは決してありません。礼拝の中でささげられた献金の中からその費用が賄われているからです。その愛餐のために食事を準備してくれる奉仕者も、自分の奉仕を神と人のために喜んで仕える「穀物のささげもの」の精神によるものです。このことがあって、礼拝と愛餐が成り立っているわけです。「和解のいけにえ」が象徴していることは、神との和解を成り立たせてくださったことに感謝して、それを主にある者たちとともに心から喜び楽しむことなのです。

ベアハリート

●以上、モーセの幕屋の入口にある「青銅の祭壇」でささげられる「五つのささげ物」について学んできました。それらのすべては、神の御子イエシュアのことを啓示しています。「罪のためのいけにえ」の中に表されているように、傷なき動物のいけにえの血が祭壇の周囲ではなく、**祭壇の土台に注がれたことは**、イエシュアの血こそ神と人のかかわりを回復する聖なる土台であること、そこに完全な罪の赦しの保証があることを象徴しています。

●またイエシュアの血潮が贖いの土台としての力となるためには、イエシュアが自ら進んで「全焼のいけにえ」が象徴する神への「全き献身」と「全き従順」の歩みがなされることが必要でした。さらにはそれと共にささげられる「穀物のささげ物」に「塩」が不可欠であったのは、「塩」が謙遜の限りを尽くして神と人に仕える者であることの象徴だからです。事実、イエシュアはまさにそのような意味の塩を保ちながら仕える者となりました。そのことのゆえに、イエシュアは神と人とを結ぶ「和解のいけにえ」ともなされたのです。つまり、イエシュアによって完成する神と人とが共に住む御国において、神と人が共に喜び楽しむことのできるようにしてくださいました。「和解のいけにえ」はヘブル語で「シェラーミーム」(שְׁלָמִים)ですが、この語源は神のご計画を完成するという動詞の「シャーレーム」(שָׁלַם)から来ています。やがて神と人とが共に住むという永遠の御国は、「新しいエルサレム」という形で、新しい地に必ずやって来ます。それゆえ、神のシャーロームの極みを永遠に味わう日が来ることを私たちは期待しつつ、忍耐と信仰をもって待ち望まなければなりません。

2016.4.10

青銅の祭壇の上で焼かれる五つのささげ物

ささげ物の名前	対 神	ささげ物の内容	神の取り分	祭司・人の取り分	血の取り扱い
<p style="text-align: center;">全焼のいけにえ (燔祭) 「オーラー」 עֹלָה</p>	自主的	<ul style="list-style-type: none"> ●傷のない若い雄牛、雄の子羊、雄やぎ、貧者は山鳩、家鳩。●牛の頭に按手した後に奉献者が屠る 	<ul style="list-style-type: none"> ●皮を除くすべての部分を完全に焼き尽くす。 	<ul style="list-style-type: none"> ●祭司は皮のみ得ることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●祭壇の<u>回りに</u>注ぎかける。
<p style="text-align: center;">穀物のささげ物 (素祭) 「ミンハー」 מִנְחָה</p>	自主的	<ul style="list-style-type: none"> ●①上等の小麦粉、それに油と乳香を添える。②輪型のパン③種の入らない薄焼き煎餅に油を塗ったもの。これらを全焼のいけにえ共にささげる。●すべて塩を入れるか、添える。 	<ul style="list-style-type: none"> ●①②③のささげ物から一握りを取って、それを「記念の部分」として祭壇で焼く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●残りの分はすべて祭司とその子らのもものとなる。 	—
<p style="text-align: center;">和解のいけにえ (酬恩祭) 「シェラーミーム」 שְׁלָמִים</p>	自主的	<ul style="list-style-type: none"> ●「全焼のいけにえ」と同様に、傷のない牛。牛に按手してから奉献者が屠る。●「牛」の場合、雄でも雌でもかまわない。 	<ul style="list-style-type: none"> ●すべての脂肪と二つの腎臓。 	<ul style="list-style-type: none"> ●残った肉と内臓は、祭司とその家族と奉献者とが共に分かち合う。動物の皮は奉献者に与えられる。 	<ul style="list-style-type: none"> ●祭壇の<u>回りに</u>注ぎかける。
<p style="text-align: center;">罪のためのいけにえ (罪祭) 「ハッタート」 חַטָּאת</p>	強制的	<ul style="list-style-type: none"> ●奉献者の身分によってささげものが異なる。大祭司と全会衆の場合は傷のない若い雄牛。「上に立つ者」の場合は雄やぎ。一般の個人の場合は「雄やぎ」か「雌羊」。 ●他の皮、頭と足、肉、内臓と汚物のすべては宿営の外のきよい所で、すなわち、灰捨て場で焼く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●雄牛の脂肪を全部、祭壇の上で焼く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●残りは贖いをした祭司のものとなり、奉献者は罪が赦される。 	<ul style="list-style-type: none"> ●血は「会見の場所」である聖所に持って入り、垂れ幕の前で血を七たび振りかける。また香壇の四隅の角と祭壇の四隅の角に血をつける。●残りの血は祭壇の土台の下に注ぐ。
<p style="text-align: center;">罪過ためのいけにえ (愆祭) 「アーシャーム」 אֲשָׁמָה</p>	強制的	<ul style="list-style-type: none"> ●「罪のためのいけにえ」の一変種とされ、償いと賠償を伴うため「賠償の献げ物」とも言う。●傷のない雄羊、および 1/5 の賠償をする。 	<ul style="list-style-type: none"> ●雄羊の脂肪を全部、祭壇の上で焼く。 	<ul style="list-style-type: none"> ●残りは贖いをした祭司のものとなり、奉献者は罪が赦される。 	<ul style="list-style-type: none"> ●祭壇の<u>回りに</u>注ぎかける。